

■差の検定結果

→回答者の特徴ごとに「幸福度の平均値」「居住継続意向を持つ回答者の割合」「ありがとう風スコア」統計的に有意な差があるか否かを検定した。

回答者の特徴	幸福度		居住継続意向を持つ回答者の割合		UJターン意向を持つ回答者の割合	
	有意差の有無	ページ数	有意差の有無	ページ数	有意差の有無	ページ数
学年	○	p.20-p.21	-		-	
世帯の種類	×	p.22	×	p.05-p.06	×	p.15
性別	×	p.23	×	p.04	×	p.14
居住地区	×	p.24	×	p.09-p.10	○	p.17-p.18
居住経歴	×	p.25	○	p.07-p.08	×	p.16
頼れる人として非同居家族をあげたか否か	×	p.26	-		-	
頼れる人として恋人をあげたか否か	○	p.27	-		-	
頼れる人として友人をあげたか否か	×	p.28				
頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否か	×	p.29				
ペットの有無	×	p.30	-		-	
部活動	×	p.31	-		-	
課外活動	×	p.32	-		-	
風スコア	○	p.40-p.41	-		-	
土スコア	○	p.41-p.42	-		-	
幸せ要因数	○	p.34-p.35	-		-	
要因ギャップ	○	p.36-p.38	-		-	
幸福度	-		○	p.01-p.03	×	p.11-p.13

有意差がある	○
有意差がない	×
分析していない	-

■普段から感じる幸せが言われてみて気付く幸せかについて

→「幸せを感じる時の質問」の各項目について、「普段から幸せを感じる要素」と回答した割合と「言われてみれば幸せを感じる要素」と回答した割合に差があるか否かを検定した。

	普段からそう感じていた	言われてみればそうだ	備考
おいしいものを飲み食いしているとき	0.740	0.196	1%水準で有意
部活に没頭しているとき	0.426	0.317	1%水準で有意
勉強に没頭しているとき	0.208	0.287	5%水準で有意
アルバイトに没頭しているとき	0.151	0.190	有意な差はないと算出された
趣味や遊びに没頭しているとき	0.792	0.151	1%水準で有意
何かをやり遂げたとき	0.701	0.224	1%水準で有意
自分自身の成長を感じたとき	0.640	0.284	1%水準で有意
新たな刺激をもらったとき	0.492	0.390	1%水準で有意
一人で何をすることもなくのんびり過ごしているとき	0.671	0.236	1%水準で有意
仲間と一緒に何かに取り組んでいるとき	0.601	0.290	1%水準で有意
仲間と何をすることもなくのんびり過ごしているとき	0.583	0.287	1%水準で有意
人に感謝されたり、喜んでもらえたりしたとき	0.692	0.230	1%水準で有意
家族や恋人と一緒に何かをしているとき	0.595	0.275	1%水準で有意
家族や恋人と何をすることもなくのんびり過ごしているとき	0.592	0.275	1%水準で有意
ペットといるとき	0.435	0.181	1%水準で有意
自然の美しさや心地よさに触れたとき	0.505	0.366	1%水準で有意
外の友人から「富良野に行きたい」と言われたとき	0.251	0.396	1%水準で有意
普段からいつも幸せを感じている	0.444	0.399	有意な差はないと算出された
とっておきの場所を見つけたとき	0.429	0.393	有意な差はないと算出された

■検定結果の概要

①. 幸福度の平均値の差の検定結果

回答者の特徴	相対的に高い ← 有意差 → 相対的に低い
学年	1年生・3年生 (相対的に高い) / 2年生 (相対的に低い)
気軽に頼れる相手として	恋人をあげた人 (相対的に高い) / 恋人をあげなかった人 (相対的に低い)
要因ギャップ	要因ギャップ数 5未満 (相対的に高い) / 要因ギャップ数 5以上 (相対的に低い)

②. 幸福度の多寡による幸せの感度の差の検定結果

回答者の特徴	相対的に高い ← 有意差 → 相対的に低い
幸せ要因数	幸福度5以上 (相対的に高い) / 幸福度4以下 (相対的に低い)

③. 居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

回答者の特徴	相対的に高い ← 有意差 → 相対的に低い
居住経歴	富良野市にしか住んだことない (相対的に高い) / 市外の居住経験あり (相対的に低い)
幸福度	幸福度4以下 (相対的に高い) / 幸福度5以上 (相対的に低い)

富良野市幸福度調査 分析結果

■高校生向けアンケートの分析結果

・分析①. 居留意向と主観的幸福度の関係

居留意向の回答ごとに、主観的幸福度の平均値及び幸福度の度数別回答者数を集計した。その結果を表 1 に示す。

表 1. 居留意向と主観的幸福度のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
住み続けたいと思っており 実際に住み続けるつもり	41	5.08	0	0	3	15	5	8	8
住み続けたいと思っているが 住み続けるのは難しそう	23	5.41	0	0	3	2	4	9	4
外に住替えたいと思っているが 住み替えは難しそう	24	5.05	1	2	1	1	5	10	2
外に住替えたいと思っており 実際に住み替えを検討している	152	5.27	0	3	16	19	40	45	28
分からない	75	5.38	0	1	0	14	25	18	13

居留意向ごとに各幸福度の該当者の割合を集計した結果を図 1 に、幸福度の平均値を算出した結果を図 2 に示す。図 1 及び図 2 より、「外に住み替えたいと思ってい

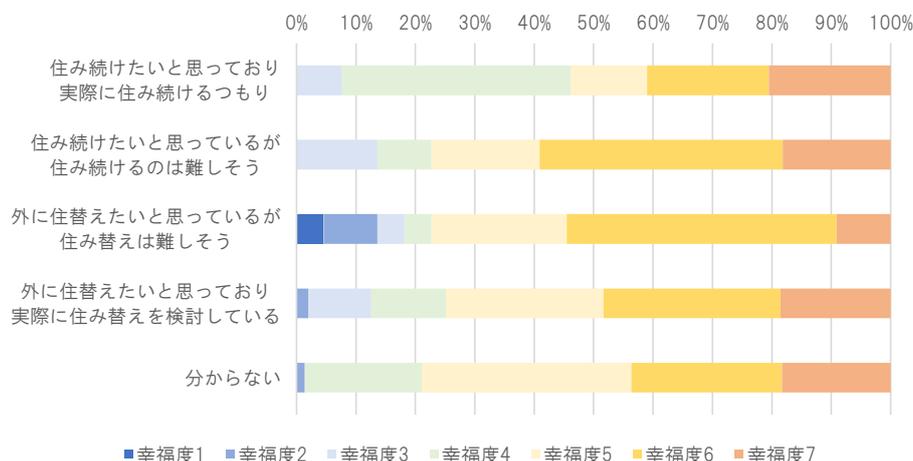


図 1. 居留意向別幸福度別回答者の割合

るが、住み替えは難しそう」および「住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり」と回答した者は他の回答者より幸福度が低い傾向が見られた。

一方、「外に住み替えたいと思っており、実際に住み替えを検討している」と回答した者の幸福度は「住み続けたいと思っており、実際に住み続けるつもり」及び「住

み続けたいと思っているが、住み続けるのは難しそう」（以降、両者を合わせて「居住継続意向を持つ回答者」と記載する）の幸福度よりも若干高い傾向にある。

居住継続意向を持つ回答者と住み替え意向を持つ回答者（以降、「外に住み替えたいと思っているが、住み替えは難しそう」及び「外に住み替えたいと思っており、実際に住み替えを検討している」と回答した者を「住み替え意向を持つ回答者」と記載する）で幸福度の平均値に差があるか否かを確認するべく t 検定を行った。その結果、両者の幸福度の平均値には統計的に有意な差はないと判断された（平均値の差を検定した結果、有意水準が 10%未満ならば差があると判断する）（表 2）。なお、t 検定に当たっては、幸福度の回答を標準化している（以降の分析も同様の処理を行っている）。

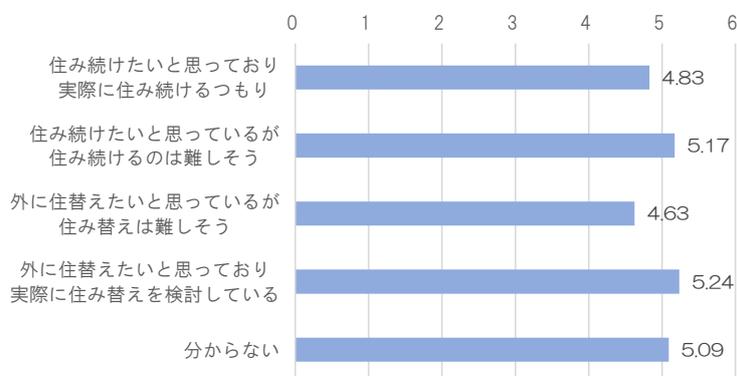


図 2. 居住継続意向別幸福度の平均値

表 2. 居住継続意向を持つ回答者と住み替え意向を持つ回答者の幸福度の差の検定結果

	居住継続意向あり	居住継続意向なし
平均	-0.012	0.122
分散	1.292	1.015
観測数	64	176
仮説平均との差異	0	
自由度	101	
t	-0.834	
P(T<=t) 片側	0.203	
t 境界値 片側	1.660	
P(T<=t) 両側	0.406	
t 境界値 両側	1.984	

次に、幸福度の多寡によって居住意向に異なる傾向があるのかを確かめるべく、幸福度の度数ごとに居住継続意向を持つ回答者の割合を集計したところ、幸福度 3 及び 4 のグループの居住継続意向の割合は、幸福度 5 以上のグループの居住継続意向の割合より高い傾向が見られた（図 3）。なお、幸福度 1、幸福度 2 のグループはそれぞれサンプル数が 1、6 と極端に小さいため、平均値によって他のグループと比較して傾向を議論するのは難しい。

幸福度が4以下の回答者と5以上の回答者で住み替え意向を持つ回答者の割合に差があるか否か確認するべくt検定を行った。その結果、10%水準で有意な差があると判断された(表3)。これらの結果から、幸福度が高い回答者は居住継続意向が強い傾向にあると考えられた(図4)。

表3. 幸福度の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

	幸福度5以上	幸福度4以下
平均	0.165	0.260
分散	0.138	0.194
観測数	231	100
仮説平均との差異	0	
自由度	163	
t	-1.894	
P(T<=t) 片側	0.030	
t 境界値 片側	1.654	
P(T<=t) 両側	0.060	
t 境界値 両側	1.975	

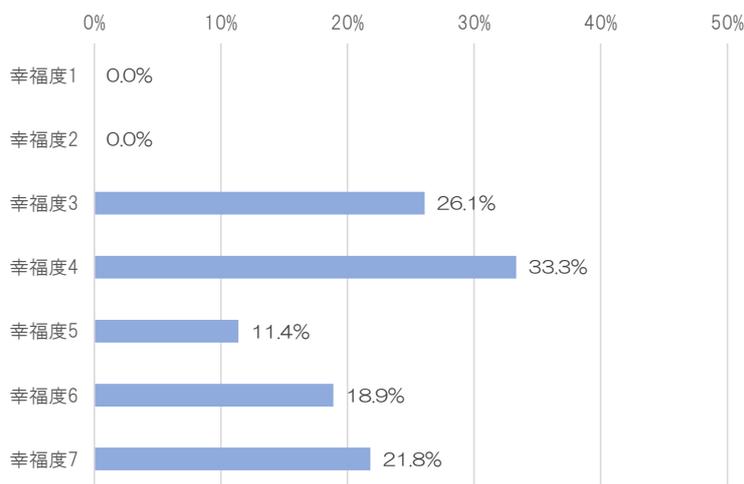


図3. 幸福度別居住継続意向を持つ回答者の割合

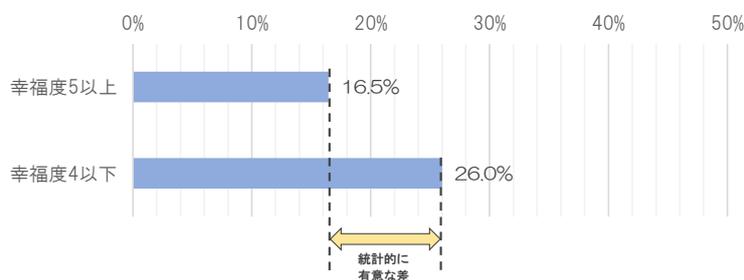


図4. 幸福度5以上の回答者と4以下の回答者の居住継続意向を持つ回答者の割合

・分析②. 居住継続意向を持つ回答者の特徴

【その1：居留意向と回答者の性別の関係】

居留意向の回答ごとに、男女別回答者数を集計した結果を表4に示す。また、男女別に住み替え意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図5に示す。表4及び図5より、男性の回答者は女性の回答者よりも住み替え意向を持つ回答者の割合が高い傾向が見られた。

住み替え意向を持つ回答者の割合の差が統計的に有意か否かを確認するべく t 検定を行った。その結果、統計的に有意な差（有意水準 10%未満）はないと判断された（表5）。

表4. 居留意向と回答者の性別のクロス集計表

	サンプル数	性別	
		男性	女性
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	41	17	23
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	23	13	10
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	24	11	13
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	152	50	94
分からない	75	37	34

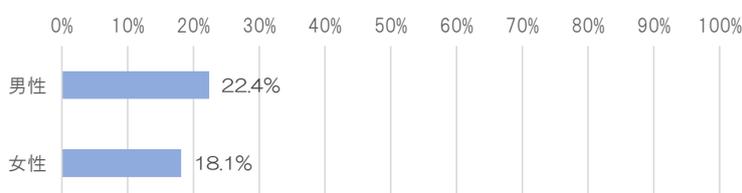


図5. 男女別居住継続意向を持つ回答者の割合

表5. 回答者の性別の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

	男性	女性
平均	0.224	0.181
分散	0.175	0.149
観測数	134	182
仮説平均との差異	0	
自由度	273	
t	0.923	
P(T<=t) 片側	0.178	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.357	
t 境界値 両側	1.969	

【その2：居留意向と世帯の種類の関係】

居留意向の回答ごとに、世帯の種類（3種類）別回答者数を集計した。その結果を表6に示す。また、世帯の種類（3種類）別に住み替え意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図6に示す。表6及び図6より、一人暮らしの回答者は、核家族世帯や多世代居住世帯（家族と同居する回答者）より住み替え意向を持つ世帯の割合が相対的に高い傾向が見られた。

各種世帯の居住継続意向を持つ世帯の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、5%水準で有意な差があると判断された（表7）。

表6. 居留意向と世帯の種類のカロス集計表

	サンプル数	世帯特性		
		一人暮らし	核家族世帯	多世代居住世帯
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	41	2	28	11
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	23	0	13	10
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	24	0	20	4
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	152	1	113	38
分からない	75	0	58	17

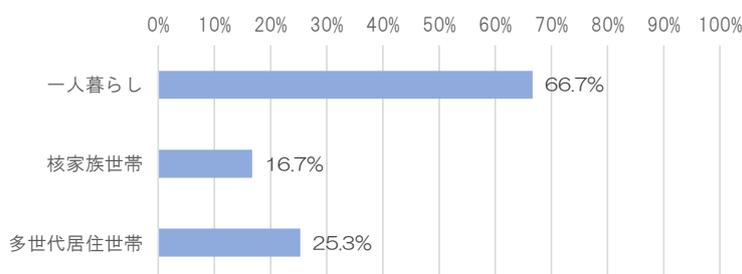


図6. 世帯の種類別居住継続意向を持つ回答者の割合

表7. 世帯の種類の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果①

グループ	データの個数	合計	平均	分散
一人暮らし	3	2	0.667	0.333
核家族世帯	245	41	0.167	0.140
多世代居住世帯	83	21	0.253	0.191

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	1.133	2	0.567	3.681	0.023	3.023
グループ内	50.492	328	0.154			
合計	51.625	330				

ただし、「一人暮らし」の回答者のサンプル数は3と非常に少ないため、「一人暮らし」のグループとそれ以外のグループ差の有無をt検定で確認したところ、統計的に有意な差はないと判断された（表8, 表9）。また「核家族世帯」と「多世代居住世帯」のグループ間についても同様にt検定を行ったが、この両者の間にも統計的に有意な差はないと判断された（表10）。

表 8. 世帯の種類の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果②

	一人暮らし	核家族世帯
平均	0.667	0.167
分散	0.333	0.140
観測数	3	245
仮説平均との差異	0	
自由度	2	
t	1.494	
P(T<=t) 片側	0.137	
t 境界値 片側	2.920	
P(T<=t) 両側	0.274	
t 境界値 両側	4.303	

表 9. 世帯の種類の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果③

	一人暮らし	多世代居住世帯
平均	0.667	0.253
分散	0.333	0.191
観測数	3	83
仮説平均との差異	0	
自由度	2	
t	1.228	
P(T<=t) 片側	0.172	
t 境界値 片側	2.920	
P(T<=t) 両側	0.344	
t 境界値 両側	4.303	

表 10. 世帯の種類の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果④

	核家族世帯	多世代居住世帯
平均	0.167	0.253
分散	0.140	0.191
観測数	245	83
仮説平均との差異	0	
自由度	125	
t	-1.597	
P(T<=t) 片側	0.056	
t 境界値 片側	1.657	
P(T<=t) 両側	0.113	
t 境界値 両側	1.979	

【その3：居留意向と居住経歴の関係】

居留意向の回答ごとに、居住経歴（3区分）別回答者数を集計した。その結果を表11に示す。また、居住経歴（3区分）別に住み替え意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図7に示す。表11及び図7より、居住継続意向を持つ回答者の割合は、「富良野市のみ」、「富良野圏のみ」、「富良野圏以外での居住経歴あり」の順に高かった。

各居住経歴グループの居住継続意向を持つ回答者の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された（表12）。

表 11. 居留意向と居住経歴のクロス集計表

	サンプル数	居住経歴		
		富良野市のみ	富良野圏のみ	富良野圏以外での居住経歴あり
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	41	22	14	3
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	23	12	7	2
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	24	13	8	0
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	152	61	50	26
分からない	75	23	26	17

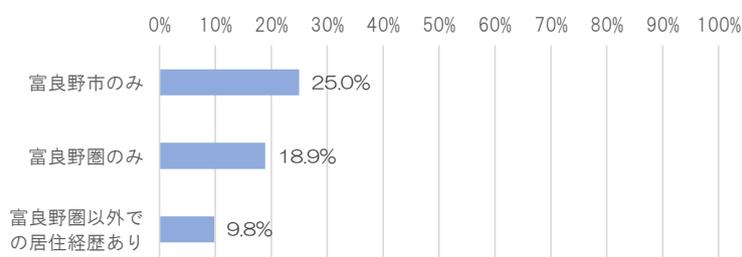


図 7. 居住経歴別居住継続意向を持つ回答者の割合

表 12. 居住経歴の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
富良野市のみ	136	34	0.250	0.189
富良野圏のみ	111	21	0.189	0.155
富良野圏以外での居住経歴あり	51	5	0.098	0.090

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	0.883	2	0.441	2.768	0.064	3.026
グループ内	47.037	295	0.159			
合計	47.919	297				

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、「富良野市のみ」と「富良野圏以外での居住経歴あり」の間に 1%水準で有意な差があると判断された（図 8）。

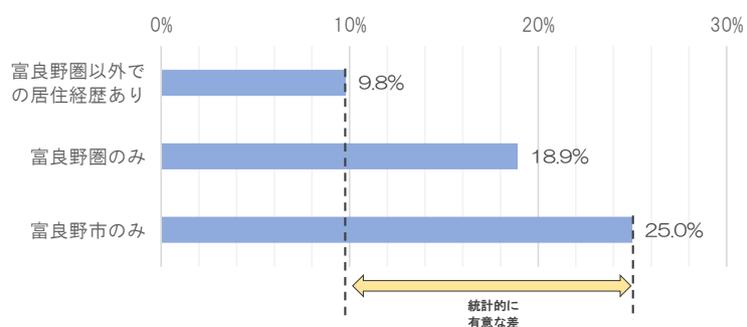


図 8. 居住経歴の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

【その4：居留意向と居住地区の関係】

居留意向の回答ごとに、居住地区（9区分）別回答者数を集計した。その結果を表13に示す。また、居住地区（9区分）別に住み替え意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図9に示す。表13及び図9より、居住継続意向を持つ回答者の割合は麓郷エリアや山部エリアで相対的に高く、市街地近郊エリアや中富良野町、南富良野町、その他で相対的に低い傾向が見られた。

表13. 居留意向と居住地区のクロス集計表

	サンプル数	居住地区								
		本市街地	市街地近郊	麓郷エリア	山部エリア	東山エリア	上富良野町	中富良野町	南富良野町	その他
住み続けたいと思っており実際に住み続けるつもり	41	21	2	2	2	0	10	2	0	1
住み続けたいと思っているが住み続けるのは難しそう	23	12	2	1	0	0	2	3	2	1
外に住替えたいと思っているが住み替えは難しそう	24	15	0	0	0	0	1	5	2	1
外に住替えたいと思っており実際に住み替えを検討している	152	77	14	1	4	0	17	18	12	9
分からない	75	33	5	0	0	0	20	9	4	4

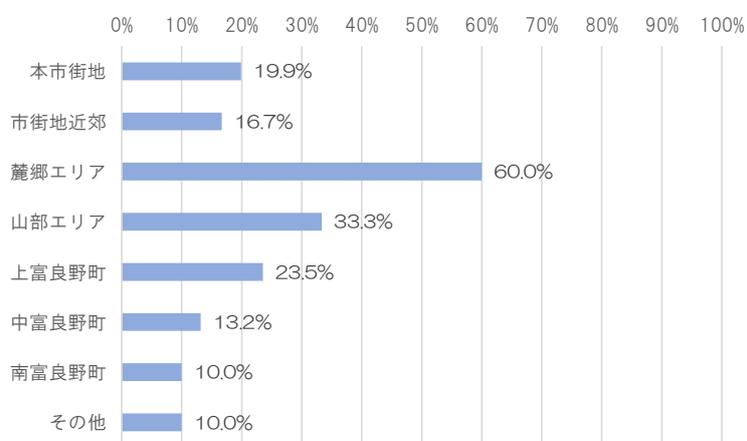


図9. 居住地区別居住継続意向を持つ回答者の割合

各地区の居住継続意向を持つ回答者の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、統計的に有意な差はない(10%水準未満)と判断された(表 14)。

表 14. 居住地区の違いによる居住継続意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
本市街地	166	33	0.199	0.160
市街地近郊	24	4	0.167	0.145
麓郷エリア	5	3	0.600	0.300
山部エリア	6	2	0.333	0.267
上富良野町	51	12	0.235	0.184
中富良野町	38	5	0.132	0.117
南富良野町	20	2	0.100	0.095
その他	20	2	0.100	0.095

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	1.548	7.000	0.221	1.440	0.188	2.038
グループ内	49.425	322.000	0.153			
合計	50.973	329.000				

・分析③. UJ ターン意向と主観的幸福度の関係

UJ ターン意向の回答ごとに、主観的幸福度の平均値及び幸福度の度数別回答者数を集計した。その結果を表 15 に示す。「分からない」の回答が 99 人と有効回答数の 59.6%を占めており、多くの高校生が、将来の UJ ターンについてまだ明確な意向を持っていないものと考えられる。

UJ ターンについて考えている高校生の回答に着目すると、「いつかまた住みたい」と回答したグループは、幸福度 6 以上の回答者がほかの回答に比べて多かった。一方、「住みたくない」と回答したグループでは、幸福度 5 以上の回答者がほかの回答よりも少なかった。

UJ ターン意向ごとに各幸福度の該当者の割合を集計した結果を図 10 に、幸福度の平均値を算出した結果を図 11 に示す。図 10 及び図 11 より、「住みたくない」と回答した者は他の回答者より幸福度が低い傾向が見られた。

表 15. UJ ターン意向と主観的幸福度のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
いつかまた住みたい	34	5.38	0	1	2	3	8	14	4
住みたくない	33	4.73	0	2	6	7	7	6	5
分からない	99	5.31	1	1	8	11	30	28	18

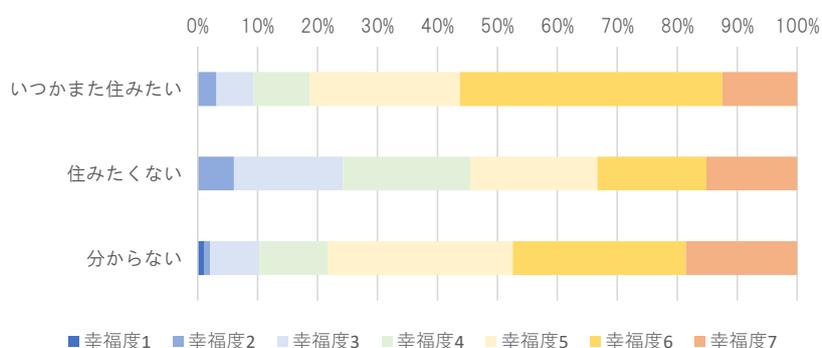


図 10. UJ ターン意向別幸福度別回答者の割合



図 11. UJ ターン意向別幸福度の平均値

UJ ターン意向ごとの幸福度に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、統計的に有意な差はない（10%水準未満）と判断された（表 16）。

表 16. UJ ターン意向の有無による幸福度の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
いつかまた住みたい	34	1.989	0.058	1.362
住みたくない	33	-5.409	-0.164	1.020
分からない	99	15.299	0.155	0.982

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	2.517	2	1.259	1.180	0.310	3.051
グループ内	173.845	163	1.067			
合計	176.362	165				

次に、幸福度の多寡によって UJ ターン意向に異なる傾向があるのかを確かめるべく、幸福度の度数ごとに UJ ターン意向を持つ回答者の割合を集計した。その結果、幸福度 2 及び 7 のグループを除くと、幸福度が高いほど UJ ターン意向の割合も高い傾向が見られた（図 12）。

幸福度が 4 以下の回答者と幸福度 5 以上の回答者の UJ ターン意向の割合には、統計的に有意な差はない(10%水準未満)と判断された（表 17）。

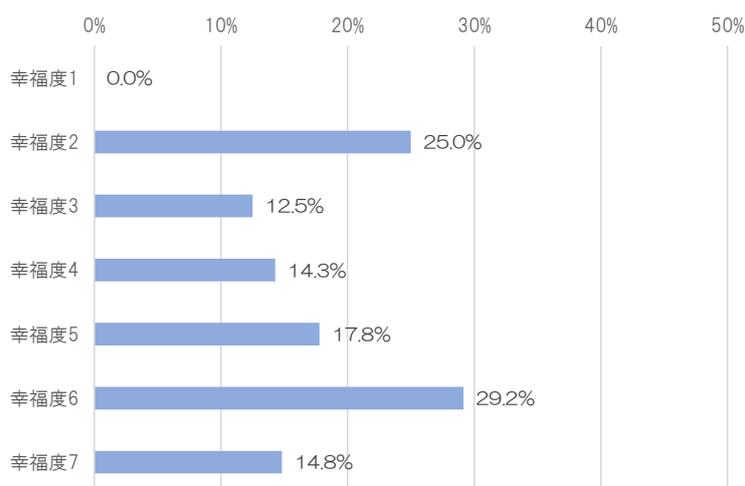


図 12. 幸福度別 UJ ターン意向の割合

表 17. 幸福度の違いによる UJ ターン意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

	幸福度5以上	幸福度4以下
平均	0.113	0.080
分散	0.100	0.074
観測数	231	100
仮説平均との差異	0	
自由度	217	
t	0.949	
P(T<t) 片側	0.172	
t 境界値 片側	1.652	
P(T<t) 両側	0.344	
t 境界値 両側	1.971	

• 分析④. UJ ターン意向を持つ回答者の特徴

【その1：UJ ターン意向と回答者の性別の関係】

UJ ターン意向の回答ごとに、男女別回答者数を集計した結果を表 18 に示す。また、男女別に UJ ターン意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図 13 に示す。表 18 及び図 13 より、女性の回答者は男性の回答者よりも UJ ターン意向の割合が高い傾向が見られた。

この両者の UJ ターン意向を持つ回答者の割合の差が統計的に有意か否かを確認するべく t 検定を行ったところ、統計的に有意な差（10%水準未満）はないと判断された（表 19）。

表 18. UJ ターン意向と回答者の性別のクロス集計表

	サンプル数	性別	
		男性	女性
いつかまた住みたい	34	12	21
住みたくない	33	13	17
分からない	99	34	59

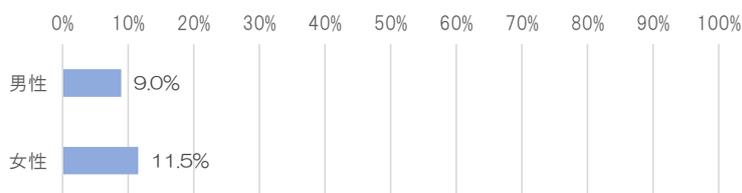


図 13. 男女別 UJ ターン意向を持つ回答者の割合

表 19. 回答者の性別の違いによる UJ ターン意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

	男性	女性
平均	0.090	0.115
分散	0.082	0.103
観測数	134	182
仮説平均との差異	0	
自由度	302	
t	-0.753	
P(T<=t) 片側	0.226	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.452	
t 境界値 両側	1.968	

【その2：UJ ターン意向と世帯の種類の関係】

UJ ターン意向の回答ごとに、世帯の種類（3種類）別回答者数を集計した。その結果を表 20 に示す。また、世帯の種類（3種類）別に UJ ターン意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図 14 に示す。表 20 及び図 14 より、核家族世帯より多世代居住世帯の方が UJ ターン意向を持つ回答者の割合が相対的に高い傾向が見られた。

ただし、各種世帯の UJ ターン意向を持つ回答者の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、統計的に有意な差（10%水準未満）はないと判断された（表 21）。

表 20. UJ ターン意向と世帯の種類のカロス集計表

	サンプル数	世帯特性		
		一人暮らし	核家族世帯	多世代居住世帯
いつかまた住みたい	34	0	22	12
住みたくない	33	0	27	6
分からない	99	1	72	26

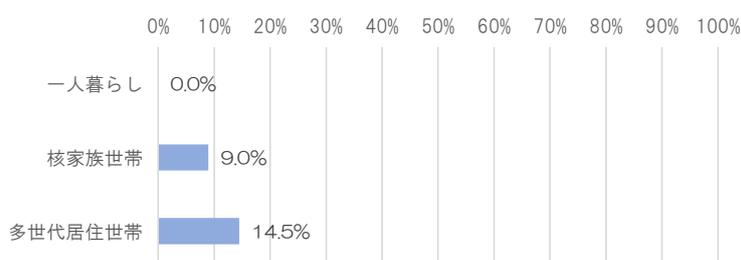


図 14. 世帯の種類別 UJ ターン意向を持つ回答者の割合

表 21. 世帯の種類の違いによる UJ ターン意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
一人暮らし	3	0	0.000	0.000
核家族世帯	245	22	0.090	0.082
多世代居住世帯	83	12	0.145	0.125

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	0.218	2	0.109	1.180	0.308	3.023
グループ内	30.290	328	0.092			
合計	30.508	330				

【その3：UJ ターン意向と居住経歴の関係】

UJ ターン意向の回答ごとに、居住経歴（3 区分）別回答者数を集計した。その結果を表 22 に示す。また、居住経歴（3 区分）別に UJ ターン意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図 15 に示す。表 22 及び図 15 より、富良野市にしか住んだことのない回答者は UJ ターン意向を持つ回答者の割合が相対的に高い傾向が見られた。

ただし、各居住経歴グループの UJ ターン意向を持つ回答者の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、統計的に有意な差（10%水準未満）はないと判断された（表 23）。

表 22. UJ ターン意向と居住経歴のクロス集計表

	サンプル数	居住履歴		
		富良野市のみ	富良野圏のみ	富良野圏以外での居住経歴あり
いつかまた住みたい	34	19	9	4
住みたくない	33	12	9	6
分からない	99	38	34	18

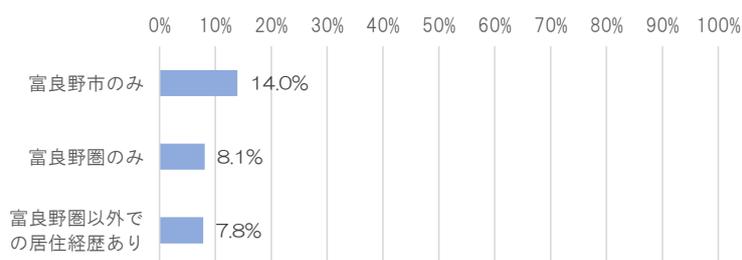


図 15. 居住経歴別 UJ ターン意向を持つ回答者の割合

表 23. 居住経歴の違いによる UJ ターン意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
富良野市のみ	136	19	0.140	0.121
富良野圏のみ	111	9	0.081	0.075
富良野圏以外での居住経歴あり	51	4	0.078	0.074

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	0.262	2	0.131	1.363	0.257	3.026
グループ内	28.302	295	0.096			
合計	28.564	297				

【その4：UJ ターン意向と居住地区の関係】

UJ ターン意向の回答ごとに、居住地区（9 区分）別回答者数を集計した。その結果を表 24 に示す。また、居住地区（9 区分）別に UJ ターン意向を持つ回答者の割合を集計した結果を図 16 に示す。表 24 及び図 16 より、UJ ターン意向を持つ回答者の割合は山部エリアや麓郷エリアで相対的に高く、市街地近郊エリアや富良野市以外の地域で相対的に低い傾向が見られた。

各地区の居住継続意向を持つ回答者の割合に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、5%水準で有意な差があると判断された（表 25）。

表 24. UJ ターン意向と居住地区のクロス集計表

	サンプル数	居住地区								
		本市街地	市街地近郊	麓郷エリア	山部エリア	東山エリア	上富良野町	中富良野町	南富良野町	その他
いつかまた住みたい	34	21	2	1	3	0	1	4	1	1
住みたくない	33	13	5	0	0	0	6	3	6	0
分からない	99	53	7	0	2	0	12	11	5	9

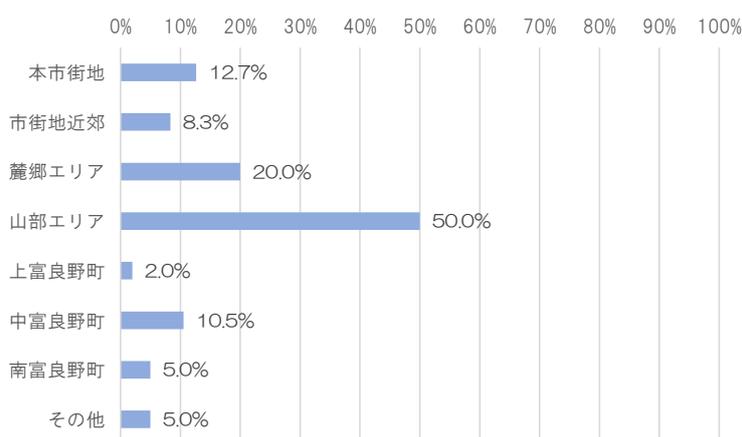


図 16. 居住地区別 UJ ターン意向を持つ回答者の割合

表 25. 居住地区の違いによる UJ ターン意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
本市街地	166	21	0.127	0.111
市街地近郊	24	2	0.083	0.080
麓郷エリア	5	1	0.200	0.200
山部エリア	6	3	0.500	0.300
上富良野町	51	1	0.020	0.020
中富良野町	38	4	0.105	0.097
南富良野町	20	1	0.050	0.050
その他	20	1	0.050	0.050

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	1.561	7	0.223	2.481	0.017	2.038
グループ内	28.936	322	0.090			
合計	30.497	329				

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、「本市街地」と「上富良野町」間に 1%水準で有意な差があると判断された(図 17)。それ以外の組み合わせについては、統計的に有意な差(10%水準未満)は見られなかった。

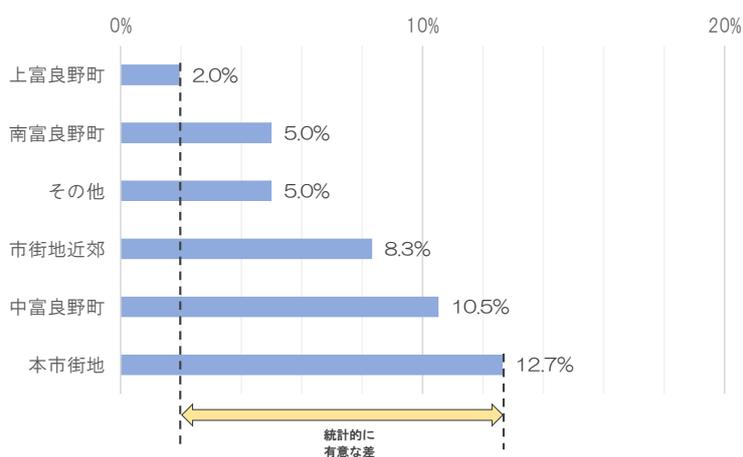


図 17. 居住地区の違いによる UJ ターン意向を持つ回答者の割合の差の検定結果

※山部、麓郷はサンプル数が少ないため検定結果からは除外した。

【小括：高校生の居留意向の特徴】

以上の分析から、高校生は次のような居留意向を持っている傾向にあると考えられた。

- ①. 「幸福度が4以下の回答者」は、「幸福度が5以上の回答者」よりも住み替え意向を持つ回答者の割合が高い傾向にある。なお、この傾向は一般向けアンケートの結果と逆であった。
- ②. 「富良野市にしか住んだことのない回答者」は、「富良野圏外での居住経歴を持つ回答者」よりも住み替え意向を持つ回答者の割合が相対的に高い傾向にある。この傾向も一般向けアンケートの結果と逆であった。
- ③. 回答者の性別、世帯の種類、居住地区によって住み替え意向を持つ回答者の割合に統計的に有意な差はないと判断された。
- ④. UJ ターン意向については、「分からない」の回答が有効回答数の59.6%を占め、多くの高校生は将来のUJ ターンについてまだ明確な意向を持っていないと考えられる。
- ⑤. 上富良野町居住の回答者より本市街地居住の回答者の方がUJ ターン意向を持つ傾向にある。
- ⑥. 幸福度・回答者の性別・世帯の種類・居住履歴の違いでUJ ターン意向を持つ回答者の割合に統計的に有意な差はないと判断された。

• 分析⑤. 主観的幸福度の多寡に影響する回答者属性

【その1：幸福度と回答者の学年の関係】

幸福度の度数ごとに、学年別回答者数を集計した。その結果を表 26 に示す。また、学年別に幸福度の平均値を算出した結果を図 18 に示す。表 26 及び図 18 より、2 年生の幸福度が相対的にやや低めであった。

学年による幸福度の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された（表 27）

表 26. 幸福度と回答者の学年のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
1年生	123	5.24	0	4	4	20	32	36	24
2年生	83	4.75	1	0	9	17	20	19	12
3年生	122	5.15	0	2	10	18	28	38	22

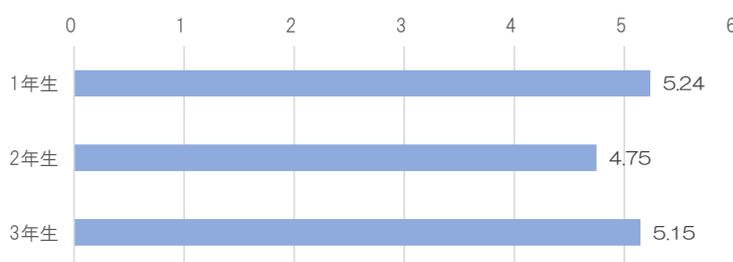


図 18. 学年別幸福度の平均値

表 27. 回答者の学年の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
1年生	123	644	5.236	2.231
2年生	83	394	4.747	3.118
3年生	122	628	5.148	2.474

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	12.745	2	6.373	2.504	0.083	3.024
グループ内	827.194	325	2.545			
合計	839.939	327				

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、「2年生」と「3年生」の間及び「2年生」と「1年生」の間に5%~10%水準でそれぞれ有意な差があると判断された(図19)。これらのことから、統計的に、2年生は1年生・3年生より幸福度が低い傾向にあると考えられた。

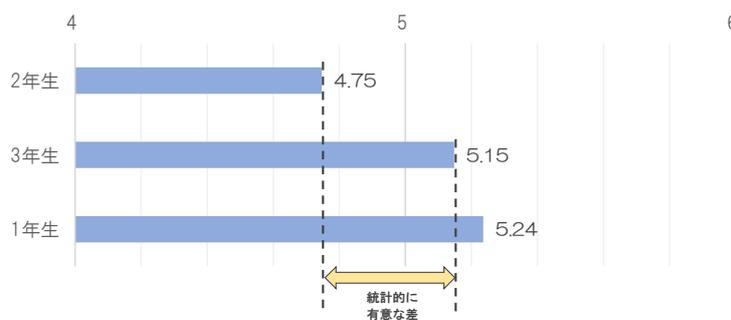


図19. 学年の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その2：幸福度と世帯の種類の関係】

幸福度の度数ごとに、世帯の種類（3種類）別回答者数を集計した。その結果を表28に示す。また、世帯の種類（3種類）別に幸福度の平均値を算出した結果を図20に示す。表28及び図20より、一人暮らしの回答者は、他と比べて幸福度が相対的に低い傾向が見られた。

ただし、世帯の種類による幸福度の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、統計的に有意な差（10%水準未満）は確認されなかった（表29）

表 28. 幸福度と世帯の種類のカロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
一人暮らし	3	4.67	0	0	1	1	0	0	1
核家族世帯	245	5.07	1	3	18	42	62	68	42
多世代居住世帯	83	5.00	0	3	4	13	18	25	15

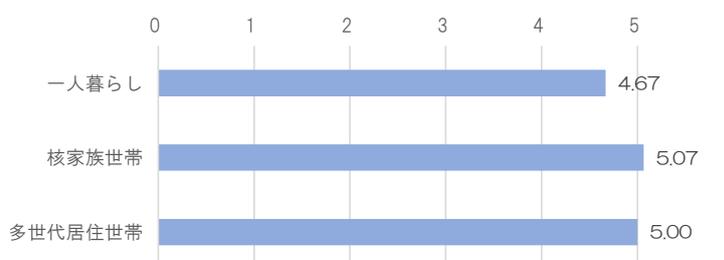


図 20. 世帯の種類別幸福度の平均値

表 29. 世帯の種類の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
一人暮らし	3	-0.614	-0.205	1.950
核家族世帯	245	15.394	0.063	1.138
多世代居住世帯	83	1.579	0.019	1.460

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	0.314	2	0.157	0.128	0.879	3.023
グループ内	401.162	328	1.223			
合計	401.476	330				

【その3：幸福度と回答者の性別の関係】

幸福度の度数ごとに、男女別回答者数を集計した。その結果を表 30 に示す。また、男女別に幸福度の平均値を算出した結果を図 21 に示す。男性と女性の幸福度の平均値はほぼ同じであった。

性別による幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、統計的に有意な差（10%水準未満）は確認されなかった（表 31）

表 30. 幸福度と回答者の性別のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
男性	134	5.06	1	3	9	27	30	34	26
女性	182	5.05	0	2	12	26	46	57	29

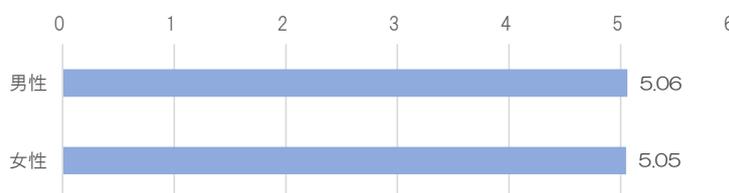


図 21. 男女別幸福度の平均値

表 31. 回答者の性別の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

	男性	女性
平均	0.059	0.052
分散	1.162	1.279
観測数	134	182
仮説平均との差異	0	
自由度	294	
t	0.055	
P(T<=t) 片側	0.478	
t 境界値 片側	1.650	
P(T<=t) 両側	0.956	
t 境界値 両側	1.968	

【その4：幸福度と居住地区の関係】

幸福度の度数ごとに、居住地区（9区分）別回答者数を集計した。その結果を表32に示す。また、居住地区（9区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図22に示す。表32及び図22より、幸福度は「その他の地区」でやや高く、本市街地や市街地近郊でやや低い傾向が見られた。

各地区の幸福度に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、どのグループ間にも有意な差（10%水準未満）は確認されなかった（表33）。

表 32. 幸福度と居住地区のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
本市街地	166	4.96	1	3	13	22	44	49	25
市街地近郊	24	4.96	0	1	3	6	2	10	2
麓郷エリア	5	5.00	0	0	0	0	1	1	2
山部エリア	6	5.17	0	0	0	2	2	1	1
東山エリア	0	-	0	0	0	0	0	0	0
上富良野町	51	5.14	0	0	2	14	10	11	12
中富良野町	38	5.08	0	0	4	6	10	12	5
南富良野町	20	5.20	0	1	1	3	8	2	5
その他	20	5.65	0	1	0	3	3	7	6



図 22. 居住地区別幸福度の平均値

表 33. 居住地区の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
本市街地	166	-1.537	-0.009	1.338
市街地近郊	24	-0.214	-0.009	0.879
麓郷エリア	5	0.095	0.019	3.824
山部エリア	6	0.785	0.131	0.615
上富良野町	51	5.666	0.111	1.170
中富良野町	38	2.735	0.072	0.958
南富良野町	20	3.064	0.153	0.881
その他	20	9.101	0.455	0.818

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	4.382	7	0.626	0.523	0.817	2.038
グループ内	385.607	322	1.198			
合計	389.988	329				

【その5：居留意向と居住経歴の関係】

幸福度の度数ごとに、居住経歴（3区分）別回答者数を集計した。その結果を表34に示す。また、居住経歴（3区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図23に示す。表34及び図23より、幸福度の平均値は、「富良野圏以外での居住経歴あり」、「富良野圏のみ」、「富良野市のみ」の順に高かった。

ただし、居住経歴の違いによる幸福度の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、統計的に有意な差（10%水準未満）は確認されなかった（表35）。

表 34. 幸福度と居住経歴のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
富良野市のみ	136	4.87	1	2	12	21	33	41	18
富良野圏のみ	111	5.10	0	2	6	22	27	29	21
富良野圏以外での居住経歴あり	51	5.25	0	2	3	6	15	12	12



図 23. 居住経歴別幸福度の平均値

表 35. 居住経歴の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
富良野市のみ	136	-9.486	-0.070	1.378
富良野圏のみ	111	9.491	0.086	1.129
富良野圏以外での居住経歴あり	51	9.690	0.190	1.059

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	2.999	2	1.499	1.218	0.297	3.026
グループ内	363.185	295	1.231			
合計	366.183	297				

【その6：幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 36 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 24 に示す。表 36 及び図 24 より、気軽に頼れる相手として非同居家族をあげた人はそうでない回答者よりも幸福度が相対的に高い傾向が見られた。

ただし、気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、統計的に有意な差はないと判断された（表 37）。

表 36. 幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として非同居家族をあげた人	225	5.09	1	1	16	35	48	69	43
頼れる人として非同居家族をあげなかった人	106	4.94	0	5	7	21	32	24	15

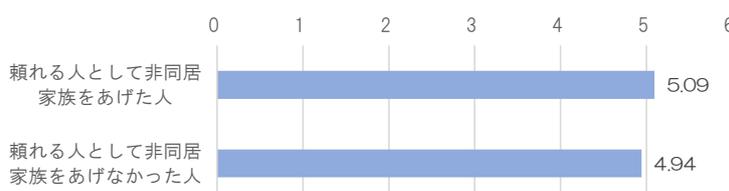


図 24. 気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否か別幸福度の平均値

表 37. 気軽に頼れる相手として非同居家族をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	頼れる非同居家族がいる	頼れる非同居家族がない
平均	0.082	-0.019
分散	1.332	0.976
観測数	225	106
仮説平均との差異	0	
自由度	237	
t	0.818	
P(T<t) 片側	0.207	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<t) 両側	0.414	
t 境界値 両側	1.970	

【その7：幸福度と気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 38 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 25 に示す。表 38 及び図 25 より、気軽に頼れる相手として恋人をあげた人はそうでない回答者よりも幸福度が相対的に高い傾向が見られた。

気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、10%水準で有意な差があると判断された(表 39, 図 26)。

表 38. 幸福度と気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として恋人をあげた人	40	5.40	1	0	1	8	10	10	10
頼れる人として恋人をあげなかった人	291	5.00	0	6	22	48	70	83	48

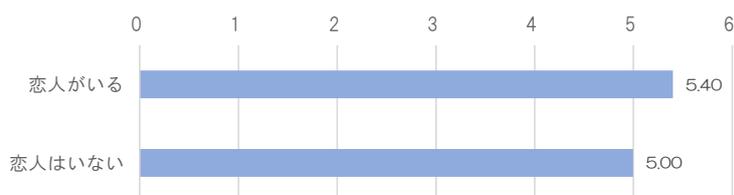


図 25. 気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否か別幸福度の平均値

表 39. 気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	恋人がいる	恋人はいない
平均	0.287	0.017
分散	0.826	1.264
観測数	40	291
仮説平均との差異	0	
自由度	57	
t	1.712	
P(T<=t) 片側	0.046	
t 境界値 片側	1.672	
P(T<=t) 両側	0.092	
t 境界値 両側	2.002	

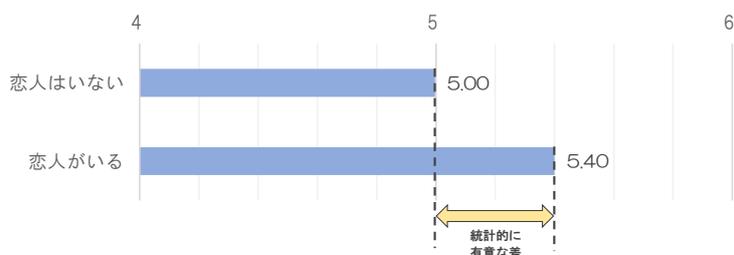


図 26. 気軽に頼れる相手として恋人をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

【その8：幸福度と気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 40 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 27 に示す。表 40 及び図 27 より、気軽に頼れる相手として友人をあげた人はそうでない回答者よりも幸福度が相対的に若干低い傾向が見られた。

ただし、気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、統計的に有意な差はないと判断された(表 41)。

表 40. 幸福度と気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として友人をあげた人	205	5.01	1	5	11	35	52	61	31
頼れる人として友人をあげなかった人	126	5.10	0	1	12	21	28	32	27

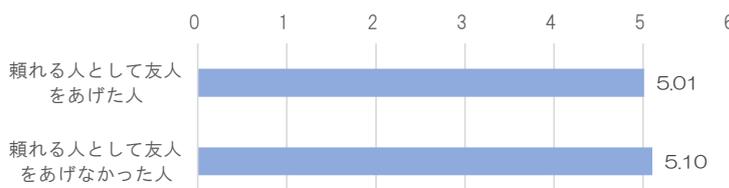


図 27. 気軽に頼れる相手として友人をあげたか否か別幸福度の平均値

表 41. 気軽に頼れる相手として友人をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	頼れる友人がいる	頼れる友人がない
平均	0.026	0.088
分散	1.213	1.230
観測数	205	126
仮説平均との差異	0	
自由度	263	
t	-0.500	
P(T<=t) 片側	0.309	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<=t) 両側	0.617	
t 境界値 両側	1.969	

【その9：幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かの関係】

幸福度の度数ごとに、気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かで回答者数を集計した。その結果を表 42 に示す。また、それぞれに幸福度の平均値を算出した結果を図 28 に示す。表 42 及び図 28 より、気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげた人はそうでない回答者よりも幸福度が相対的に低い傾向が見られた。

ただし、気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かによる幸福度の差が統計的に有意か否かを t 検定で確認したところ、統計的に有意な差はないと判断された（表 43）。

表 42. 幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かのクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげた人	12	4.17	0	2	0	0	3	4	1
頼れる人として非同居家族・恋人・友人以外をあげなかった人	319	5.08	1	4	23	56	77	89	57

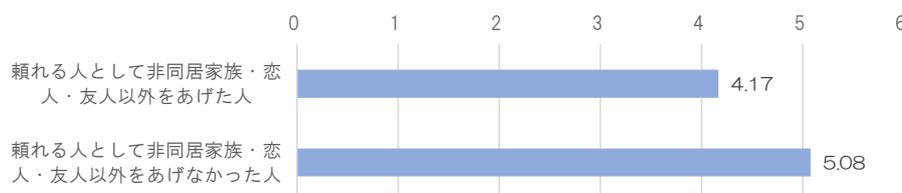


図 28. 幸福度と気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否か別幸福度の平均値

表 43. 気軽に頼れる相手として非同居家族・恋人・友人以外をあげたか否かによる幸福度の平均値の差の検定結果

	その他頼れる人がいる	その他頼れる人がいない
平均	-0.540	0.072
分散	2.768	1.153
観測数	12	319
仮説平均との差異	0	
自由度	11	
t	-1.264	
P(T<=t) 片側	0.116	
t 境界値 片側	1.796	
P(T<=t) 両側	0.233	
t 境界値 両側	2.201	

【その10：幸福度とペットの有無の関係】

幸福度の度数ごとに、ペットの有無別回答者数を集計した。その結果を表44に示す。また、ペットの有無別に幸福度の平均値を算出した結果を図29に示す。表44及び図29より、幸福度の平均値は、ペットを飼っている回答者の方が、ペットを飼っていない回答者よりも高かった。

ただし、ペットの有無による幸福度の差が統計的に有意か否かをt検定で確認したところ、統計的に有意な差（10%水準未満）は確認されなかった（表45）

表44. 幸福度とペットの有無のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
ペットを飼っている	107	5.11	1	2	8	19	24	35	16
ペットを飼っていない	224	5.01	0	4	15	37	56	58	42

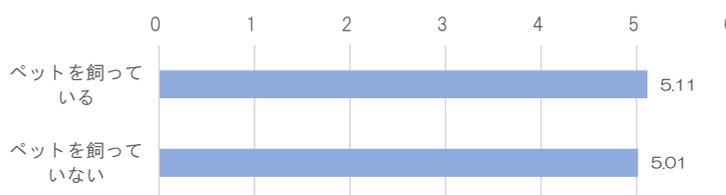


図29. ペットの有無別幸福度の平均値

表45. ペットの有無による幸福度の平均値の差の検定結果

	ペットを飼っている	ペットを飼っていない
平均	0.094	0.028
分散	0.988	1.330
観測数	107	224
仮説平均との差異	0	
自由度	239	
t	0.538	
P(T<t) 片側	0.296	
t 境界値 片側	1.651	
P(T<t) 両側	0.591	
t 境界値 両側	1.970	

【その11：幸福度と部活動・委員会活動の関係】

幸福度の度数ごとに、部活動・委員会活動の種類（6区分）別回答者数を集計した。その結果を表46に示す。また、部活動・委員会活動の種類（6区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図30に示す。幸福度の平均値は、帰宅部、運動部で、若干高めであった。

部活動・委員会活動の種類ごとの幸福度に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、統計的に有意な差(10%水準未満)は確認されなかった（表47）。

表 46. 幸福度と部活動・委員会活動の種類のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
運動部	183	5.11	0	4	11	31	50	46	35
文化部	85	4.95	0	1	7	13	21	25	13
生徒会	1	5.00	0	0	0	0	1	0	0
その他委員	0	-	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	-	0	0	0	0	0	0	0
帰宅部	12	5.17	0	1	2	0	2	5	2



図 30. 部活動・委員会活動の種類別幸福度の平均値

表 47. 部活動・委員会活動の種類による幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
運動部	183	17.568	0.096	1.099
文化部	85	-1.066	-0.013	1.349
生徒会	1	0.019	0.019	-
帰宅部	12	1.570	0.131	1.213

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	0.741	3	0.247	0.209	0.890	2.637
グループ内	326.675	277	1.179			
合計	327.416	280				

【その12：幸福度と課外活動の関係】

幸福度の度数ごとに、課外活動（7区分）別回答者数を集計した。その結果を表48に示す。また、課外活動（7区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図31に示す。幸福度の平均値は、地域のスポーツクラブに所属している回答者において相対的に高かったのに対し、習い事に通っている回答者において低かった。

ただし、各種課外活動の幸福度に差があるか否かを分散分析によって確認したところ、どのグループ間にも有意な差（10%水準未満）は確認されなかった（表49）。

表 48. 幸福度と課外活動のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
塾・家庭教師	1	5.00	0	0	0	0	1	0	0
習い事	2	3.50	0	0	0	0	0	0	1
地域のスポーツクラブ	4	6.00	0	0	0	0	1	2	1
アルバイト	0	-	0	0	0	0	0	0	0
家の仕事の手伝い	0	-	0	0	0	0	0	0	0
ボランティア活動	15	5.07	1	1	0	2	3	6	2
その他	3	5.00	0	0	1	0	1	0	1

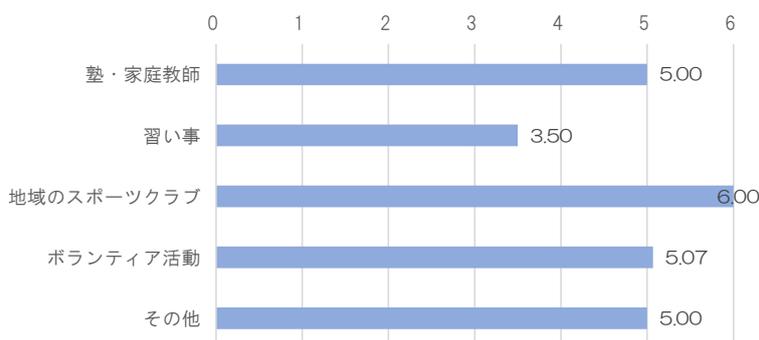


図 31. 課外活動別幸福度の平均値

表 49. 課外活動の違いによる幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
塾・家庭教師	1	0.019	0.019	-
習い事	2	-1.974	-0.987	11.023
地域のスポーツクラブ	4	2.759	0.690	0.300
ボランティア活動	15	0.956	0.064	1.315
その他	3	0.057	0.019	1.800

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	3.782	4	0.946	0.557	0.696	2.866
グループ内	33.939	20	1.697			
合計	37.722	24				

【小括：主観的幸福度の多寡に影響する回答者属性】

以上の分析から、次のような特徴が把握された。

- ①. 2年生は1年生・3年生より幸福度が低い傾向にある。
- ②. 気軽に頼れる相手として恋人をあげた回答者はそうでなかった回答者より、幸福度が高い傾向にある。
- ③. 回答者の性別・世帯の種類・居住地区・居住履歴・ペットの有無・部活動・委員会活動の種類・課外活動に関しては、それぞれのグループごとの幸福度に統計的に有意な差は確認されなかった。

・分析⑥. 主観的幸福度と幸せを感じる要因の関係

幸せを感じる時・ことの質問（問 12・13）の各項目について、回答者ごとに幸せを感じる要因に該当する項目数を集計した（以降、この項目数を「幸せ要因数」と記載する）。仮説として、「幸せ要因数が多い人は、幸せを感じる感度が高く、結果として幸福度が高くなる」と考え、幸せ要因数と幸福度の関係を整理することとした。

まず初めに、幸せの要因数と幸福度の相関関係を分析した。その結果、相関係数は 0.241 であり、幸せの要因数と幸福度は強い相関関係にないと考えられた。

次に、幸福度の度数ごとに、幸せの要因数を集計した。その結果を図 32 に示す。図 32 より、幸福度が 5 以上のグループは幸せの要因数が相対的に多いのに対し、幸福度が 4 以下のグループは相対的に少ないと分かる。

幸福度の違いによる幸せの要因数の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 50）（※分散分析に当たっては、幸せの要因数の回答を標準化している。以降の分析も同様の処理を行っている）

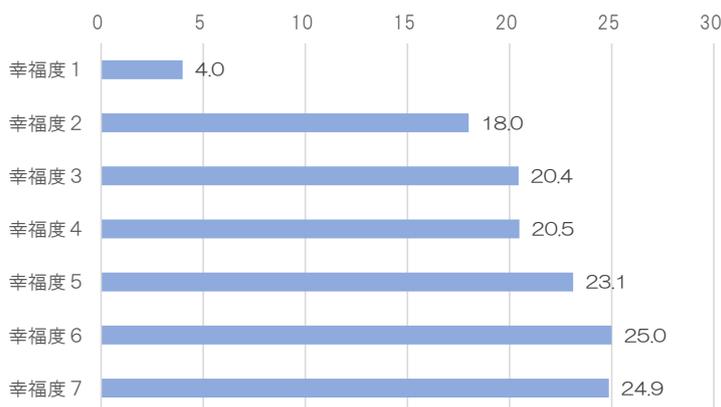


図 32. 幸福度別幸せの要因数

表 50. 幸福度別幸せの要因数の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
幸福度 1	1	26.979	26.979	-
幸福度 2	6	263.603	43.934	169.541
幸福度 3	23	1078.296	46.882	79.574
幸福度 4	56	2628.629	46.940	117.649
幸福度 5	80	4010.021	50.125	76.041
幸福度 6	93	4874.232	52.411	76.009
幸福度 7	58	3030.156	52.244	98.621

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	2320.600	6	386.767	4.330	0.000	2.128
グループ内	27690.456	310	89.324			
合計	30011.057	316				

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、幸福度 5 と幸福度 4 以下の各グループの間に 1～10%水準で有意な差が、幸福度 5 と幸福度 6 の間に 10%水準で有意な差があると判断された（図 33）。このことから、統計的に、幸福度が比較的高い回答者は幸せ要因数が多い（感度が高い）傾向にあると考えられた。

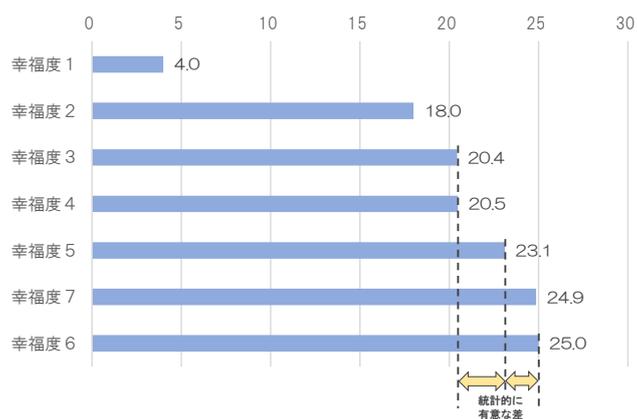


図 33. 幸福度別幸せの要因数の平均値の差の検定結果

・分析⑦. 主観的幸福度と要因ギャップの関係

「幸せの要因」をについて、仮説として、「幸せを感じる要因に該当するが、その要因を享受する機会が少ないと回答した項目が多い場合、幸福度は低めになる」と考え、その項目数を「要因ギャップ数」として設定し、幸福度との関係を調べた。「要因ギャップ数」は、回答者ごと及び幸せを感じる時・ことの質問の項目ごとに集計した（要因ギャップを感じている場合は1、感じていない場合は0とした）。項目ごとに要因ギャップを感じている回答者の割合を集計した結果を図34に示す。

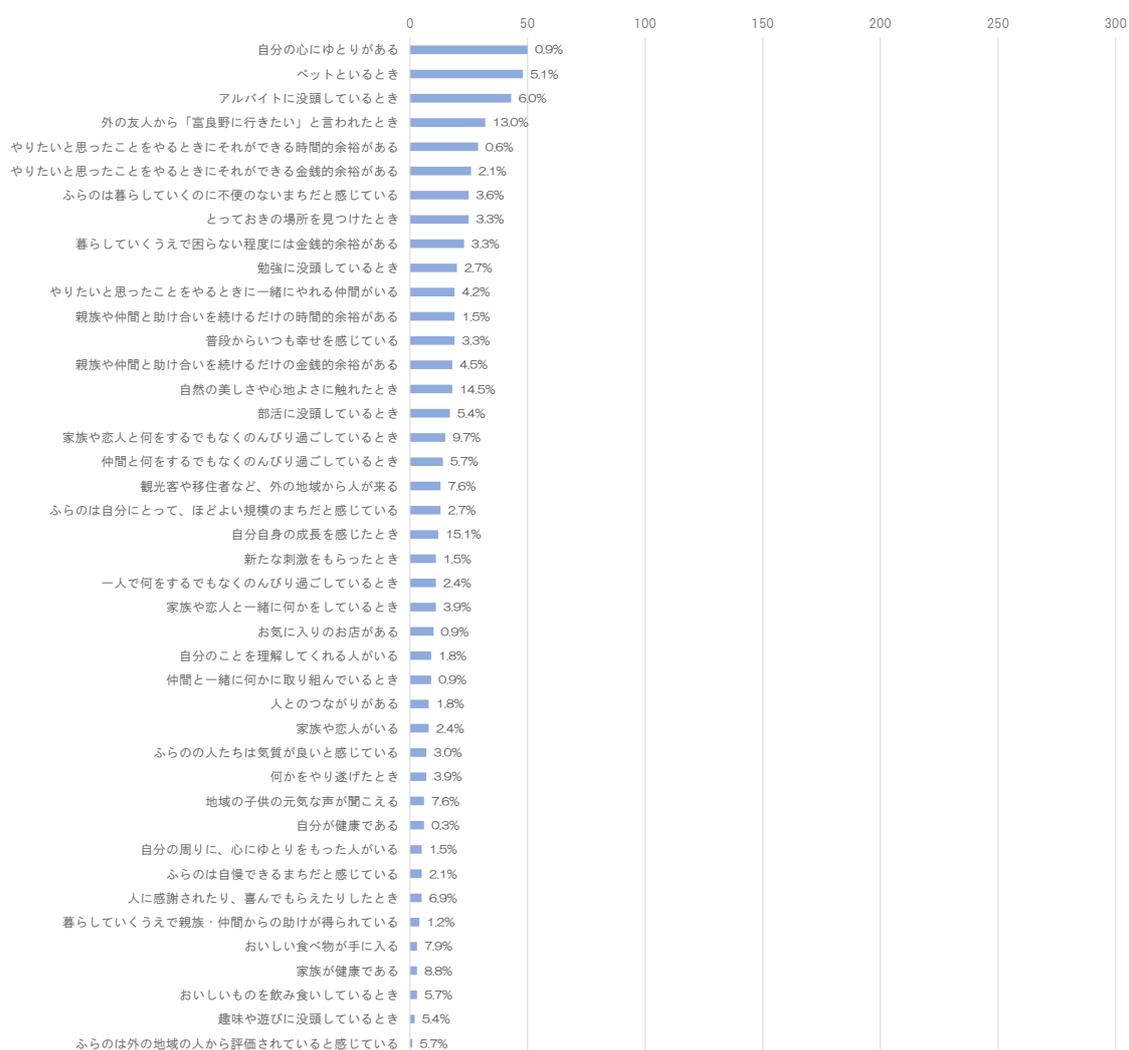


図34. 要因ギャップを感じている回答者の割合

要因ギャップの多寡が幸福度に影響しているか否かを確かめるべく、要因ギャップと幸福度の相関関係を分析した。その結果、相関係数は-0.189 となり、幸せの要因と幸福度は強い相関関係にないと考えられた。

続いて、幸福度の度数ごとに、要因ギャップ数（6 区分）別回答者数を集計した。その結果を表 51 に示す。また、要因ギャップ数（6 区分）別に幸福度の平均値を算出した結果を図 35 に示す。表 51 及び図 35 より、要因ギャップ数が 20 以上のレンジを除き、要因ギャップ数の多いレンジほど幸福度は低い傾向が見られた。

要因ギャップ数のレンジごとの幸福度の差が統計的に有意か否かを分散分析により確認したところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 52）（※要因ギャップ数 20 以上のサンプル数は 1 だったため、分散分析・t 検定の対象から除外している）。

表 51. 幸福度と要因ギャップ数のクロス集計表

	サンプル数	主観的幸福度							
		平均値	幸福度1	幸福度2	幸福度3	幸福度4	幸福度5	幸福度6	幸福度7
要因ギャップ数0	146	5.21	0	2	5	24	37	43	29
要因ギャップ数1以上5未満	143	5.06	0	1	10	25	36	44	21
要因ギャップ数5以上10未満	31	4.58	1	0	7	4	5	5	7
要因ギャップ数10以上15未満	8	4.25	0	2	1	1	2	1	1
要因ギャップ数15以上20未満	2	3.00	0	1	0	1	0	0	0
要因ギャップ数20以上	1	4.00	0	0	0	1	0	0	0

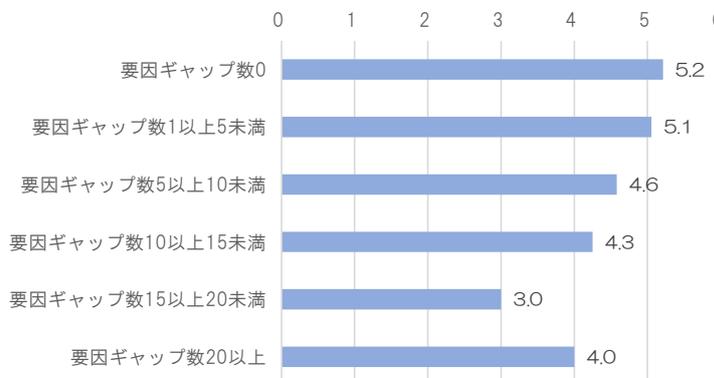


図 35. 要因ギャップ数別幸福度の平均値

表 52. 要因ギャップ数による幸福度の平均値の差の検定結果

グループ	データの個数	合計	平均	分散
要因ギャップ数0	146	23.572	0.161	1.131
要因ギャップ数1以上5未満	143	8.087	0.057	1.114
要因ギャップ数5以上10未満	31	-8.130	-0.262	1.883
要因ギャップ数10以上15未満	8	-3.872	-0.484	1.510
要因ギャップ数15以上20未満	2	-2.645	-1.322	0.900

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P-値	F 境界値
グループ間	11.384	5	2.277	1.897	0.094	2.242
グループ内	390.092	325	1.200			
合計	401.476	330				

具体的にどのグループ間で統計的に有意な差があるのかを t 検定で確認したところ、要因ギャップ数 5 未満のグループと要因ギャップ数 10 以上のグループの間に 5%水準で有意な差があると算出された（図 36）。これらのことから、統計的に要因ギャップ数が多い回答者のグループは、要因ギャップ数が少ない回答者のグループより幸福度が低い傾向にあると考えられた。



図 36. 要因ギャップ数による幸福度の平均値の差の検定結果

・分析⑧. 普段から感じる幸せが言われてみて気付く幸せかについて

幸せを感じる時の質問(問 12)の各項目について、「普段から幸せを感じる要素」と回答した割合と「言われてみれば幸せを感じる要素」と回答した割合に差があるか否かを t 検定で確認した。その結果、19 項目中 16 項目で有意な差 (1~5%水準) があると算出された。その結果を表 53 に示す。

表 53 より、「おいしいものを飲み食いしているとき」「部活に没頭しているとき」「趣味や遊びに没頭しているとき」「何かをやり遂げたとき」「自分自身の成長を感じたとき」「新たな刺激をもらったとき」「一人で何をすることもなくのんびり過ごしているとき」「仲間と一緒に何かに取り組んでいるとき」「仲間と何をすることもなくのんびり過ごしているとき」「人に感謝されたり、喜んでもらえたりしたとき」「家族や恋人と一緒に何かをしているとき」「家族や恋人と何をすることもなくのんびり過ごしているとき」「ペットといるとき」「自然の美しさや心地よさに触れたとき」は普段から幸せを感じる要素である傾向が強く、「勉強に没頭しているとき」「外の友人から「富良野に行きたい」と言われたとき」は言われてみれば幸せを感じる要素ある傾向が強いと分かる。「アルバイトに没頭しているとき」「普段からいつも幸せを感じている」「とっておきの場所を見つけたとき」はどちらとも言えない要因だった。

表 53. 普段から感じる幸せが言われてみて気付く幸せかについての検定結果

	普段からそう感じていた	言われてみればそうだ	備考
おいしいものを飲み食いしているとき	0.740	0.196	1%水準で有意
部活に没頭しているとき	0.426	0.317	1%水準で有意
勉強に没頭しているとき	0.208	0.287	5%水準で有意
アルバイトに没頭しているとき	0.151	0.190	有意な差はないと算出された
趣味や遊びに没頭しているとき	0.792	0.151	1%水準で有意
何かをやり遂げたとき	0.701	0.224	1%水準で有意
自分自身の成長を感じたとき	0.640	0.284	1%水準で有意
新たな刺激をもらったとき	0.492	0.390	1%水準で有意
一人で何をすることもなくのんびり過ごしているとき	0.671	0.236	1%水準で有意
仲間と一緒に何かに取り組んでいるとき	0.601	0.290	1%水準で有意
仲間と何をすることもなくのんびり過ごしているとき	0.583	0.287	1%水準で有意
人に感謝されたり、喜んでもらえたりしたとき	0.692	0.230	1%水準で有意
家族や恋人と一緒に何かをしているとき	0.595	0.275	1%水準で有意
家族や恋人と何をすることもなくのんびり過ごしているとき	0.592	0.275	1%水準で有意
ペットといるとき	0.435	0.181	1%水準で有意
自然の美しさや心地よさに触れたとき	0.505	0.366	1%水準で有意
外の友人から「富良野に行きたい」と言われたとき	0.251	0.396	1%水準で有意
普段からいつも幸せを感じている	0.444	0.399	有意な差はないと算出された
とっておきの場所を見つけたとき	0.429	0.393	有意な差はないと算出された

• 補足分析. 主観的幸福度と地域しあわせ風土指標の関係

幸福度の度数、風スコア、風スコア地域版、風スコア+風スコア地域版の相関係数を算出した結果を表 54 に示す。表 54 より、幸福度の度数と地域しあわせ風土指標の各スコアはそれぞれ強い相関関係にないと分かった。

表 54. 幸福度と地域しあわせ風土指標の各スコアの相関係数

	幸福度	風スコア	風地域版スコア	風スコア+風スコア地域版
幸福度	1			
風スコア	0.275	1		
風地域版スコア	0.131	0.361	1	
風スコア+風スコア地域版	0.219	0.708	0.914	1

ただし、幸福度の度数別に風スコアの平均値を見ると、幸福度 2 のグループを除くと、幸福度が高いほど風スコアも高い傾向にあった（図 37）。なお、幸福度 2 のグループはサンプル数が 6 であり、平均値によって他のグループと比較して傾向を議論するのは難しい。以上の結果を踏まえて、幸福度が比較的高い回答者（幸福度 5 以上）とそうでない回答者（幸福度 4 以下）で風スコアの平均値に差があるか否か確認するべく t 検定を行ったところ、1%水準で有意な差があると判断された（表 55）。こ

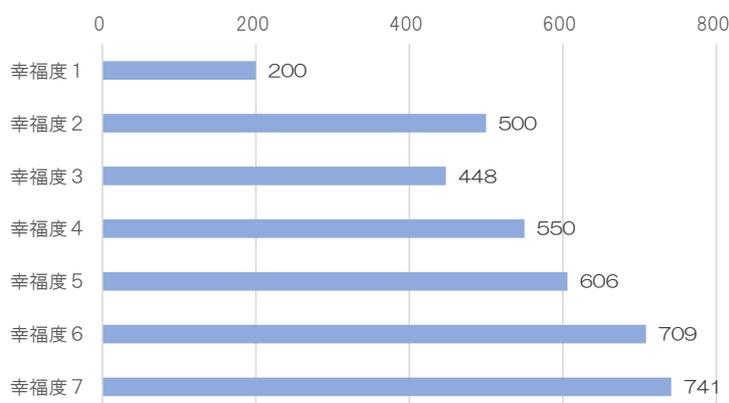


図 37. 幸福度別風スコアの平均値

表 55. 幸福度別風スコアの平均値の差の検定結果

	幸福度5以上	幸福度4以下
平均	51.898	44.715
分散	80.251	123.185
観測数	231	86
仮説平均との差異	0	
自由度	128	
t	5.384	
P(T<t) 片側	0.000	
t 境界値 片側	1.657	
P(T<t) 両側	0.000	
t 境界値 両側	1.979	

これらの結果から、幸福度が高い回答者は風スコアも高い傾向にあると確認できた（図 38）。（※分散分析に当たっては、風スコアの回答を標準化している。以降の分析も同様の処理を行っている。）

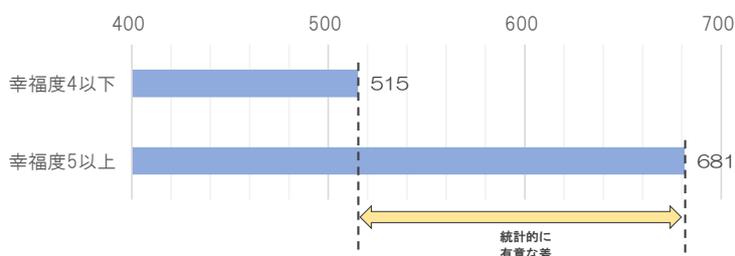


図 38. 幸福度別風スコアの平均値の差の検定結果

幸福度の度数別に風スコア地域版の平均値を見ると、幸福度 3 を除くと、幸福度が低いグループ（幸福度 4 以上）の風スコア地域版は相対的に低い傾向にあるのに対し、幸福度が高いグループ（幸福度 5 以上）の風スコア地域版は相対的に高い傾向にあった（図 39）。そこで、幸福度が比較的高い回答者（幸福度 5 以上）とそうでない回答者（幸福度 4 以下）で風スコア地域版の平均値に差があるか否か確認するべく t 検定を行ったところ、5%水準で有意な差があると判断された（表 56）。これらの結果から、幸福度が高い回答者は風スコア地域版も高い傾向にあると確認できた（図 40）。

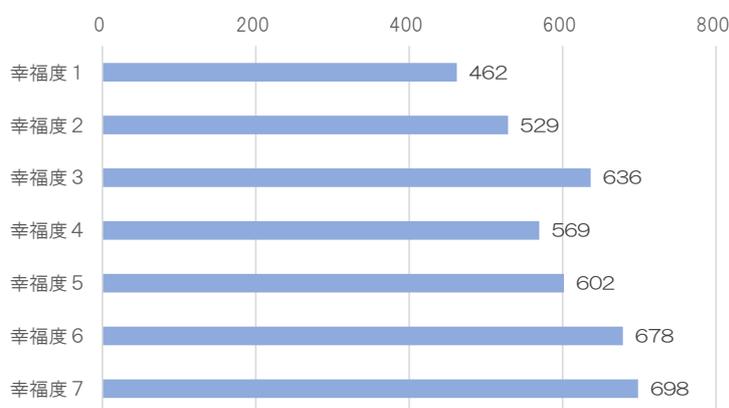


図 39. 幸福度別風スコア地域版の平均値

表 56. 幸福度別風スコア地域版の平均値の差の検定結果

	幸福度5以上	幸福度4以下
平均	50.837	47.660
分散	98.511	99.965
観測数	231	86
仮説平均との差異	0	
自由度	151	
t	2.521	
P(T<=t) 片側	0.006	
t 境界値 片側	1.655	
P(T<=t) 両側	0.013	
t 境界値 両側	1.976	

以上より、地域しあわせ風土指標と主観的幸福度は対応していることが確認できた。

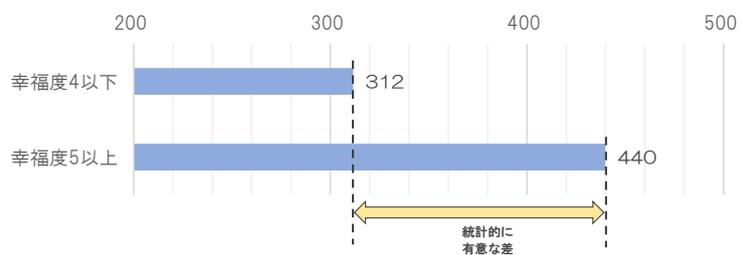


図 40. 幸福度別風スコア地域版の平均値の差の検定結果